

予防鍼灸研究会（SGPAM）

第23回定例会・
発足5周年記念講演会
抄録

テーマ：ジストニアの臨床最前線
～西洋医学と東洋医学の視点から～

2025年11月30日

目次

PC作業で生じる手指から前腕の違和感に対する鍼灸治療.....	喜島顕2
小川病院「糖尿病/物忘れ」教室の10年間の成果.....	足立克仁3
ジストニアに対する鍼治療.....	谷万喜子4
ジストニアの診断と治療、病態.....	宮本亮介5

PC作業で生じる手指から前腕の違和感に対する鍼灸治療

喜島鍼灸院 喜島顕

【背景】ジストニアとは自分の意思とは関係なく筋肉が収縮し、異常な姿勢や運動が続く状態である。両肩の凝りと右手指の違和感を訴えて来院された1例を報告する。

【対象・方法】50代の女性。事務職。主訴はX-11年頃から右前腕部～拇指・示指の運動障害と運動制限。X-9年にAクリニックを受診。「ジストニア」を疑われてB大学病院・脳神経内科を受診し、MRI(頭部及び頸部)・筋電図の検査を受けたが、病名の特定には至らず、診察は終了した。当院にはX-6年から受診。施療は本治法で右手指の症状に対しては単鍼による局所治療。両肩の凝りに対しては低周波治療も併用した。治療頻度は月3～4回だったが、両親の介護や転居等で多忙となり、通院の頻度が大幅に減少した。

【結果・考察】本治法による鍼治療は肩凝りに対しては少々であるが改善傾向が見られた。右手の運動障害では特に拇指の背屈制限が目立っていたが、なかなか改善は難しいと思われる。

【結論】「確定診断の必要性」から、X-4年5月にセカンドオピニオンとして近隣の整形外科の紹介状を通じてC病院・脳神経内科を受診し、ジストニアの確定診断が下された。その後も諸般の雑事の合間に通院を継続されている。

略歴

1983年 日本柔道整復専門学校柔整科卒業
2006年 日本鍼灸理療専門学校本科卒業
2008年 喜島鍼灸院開業 院長として現在に至る

小川病院「糖尿病/物忘れ」教室の10年間の成果

小川病院糖尿病/物忘れセンター長・NHO徳島病院名誉院長 足立克仁

【背景】我国では認知症と糖尿病は頻度が高く、関連性があり、これらの予防は喫緊の課題といえる。このため当地域の両疾患の予防を目指し、2016年から「糖尿病/物忘れセンター」を発足させ「糖尿病/物忘れ教室」を月一回開催し、両疾患の最新の情報を提供してきた。しかしこロナ禍の4年間は月一回の「糖尿病/物忘れ新聞」の発行にかえた。

【目的】この度、当センター発足10周年を迎え、10年間をまとめ、その成果について述べる。

【対象・方法】教室参加人数はコロナ禍を除いて1回あたり10～38名で女性と高齢者が多かった。この教室が地域に及ぼす影響を調べるため、物忘れ相談プログラム(MSP)値と簡易血糖値を、説明と同意のもと測定した。

【結果】1) MSP値：2017年～2025年の間に5回測定した。単回参加者の中には12点以下の物忘れが始まっている方がみられたが、継続参加者ではMSP値が年々悪化していく者はなかった。2) 簡易血糖値：2018年～2025年の間の3回、糖尿病食提供1時間後測定した。単回参加者の中には200 mg/dl以上の高値がみられたが、継続参加者では血糖値が悪化していく者はなかった。糖尿病非指摘の1名のみは223mg/dlと高値だったが、1年で182mg/dlと下降傾向がみられた。

【結論】当センター活動の継続参加者には、両疾患の悪化はみられなかった。今後も継続して参加していただきたい。

略歴

1975年 徳島大学医学部卒業
1975年 徳島大学医学部付属病院医員（第一内科）
1981年 国立療養所徳島病院医員（内科）
2004年 国立病院機構徳島病院院長
2015年 国立病院機構徳島病院名誉院長
医療法人緑会小川病院糖尿病/物忘れセンター長

研究分野

徳島県難病医療等嘱託医
鳴門市認知症サポート医
予防鍼灸研究会学術委員

ジストニアに対する鍼治療

関西医療大学大学院 保健医療学研究科
関西医療大学 保健医療学部 はり灸・スポーツトレーナー学科
谷万喜子

関西医療大学では、ジストニアに対する鍼治療効果を検討しています。多くは、ボツリヌス治療や内服薬による治療を受けたものの症状が残存している症例に対して、標準的な治療と鍼治療を併用しています。鍼治療の基本方針として、ジストニアの一次的障害である筋緊張異常に対しては、「循経取穴」の考え方を用いて罹患筋の筋緊張調整を図っています。頸部ジストニアの主な罹患筋に対する治療経穴として、胸鎖乳突筋には手陽明大腸經の合谷、僧帽筋上部線維には手少陽三焦經の外関、板状筋には手太陽小腸經の後溪あるいは手少陽三焦經の外関を用いています。不随意運動に対しては、その要因である罹患筋への治療と同時に、百会を用いています。ステンレス製のディスポーザブル鍼（20号鍼）を用いて、刺入深度約5mmで置鍼します。ジストニアの問題点として、罹患筋の筋緊張亢進ととらえられることが多いですが、筋緊張低下が問題となることもあります。鍼治療では、一つの罹患筋に対して同じ経穴を用いて筋緊張抑制と筋緊張促通を図ることができ、これは、鍼治療の利点と考えられます。また、ジストニアの治療では、筋緊張異常とともに、異常姿勢が持続することによって二次的に生じる皮膚短縮や筋短縮も問題となります。鍼治療の際は、一次的障害としての筋緊張異常と二次的障害を評価して、それぞれに対応することが重要です。具体的な治療について、実技とともにご紹介します。

略歴

- 1986年 帝塚山学院大学 文学部日本文学科卒業
- 1991年 関西鍼灸短期大学 鍼灸学科卒業
- 1991年 関西鍼灸短期大学附属診療所勤務
- 1992年 関西鍼灸短期大学助手
- 1999年 関西鍼灸短期大学講師
- 2003年 関西鍼灸大学講師
- 2007年 関西医療大学保健医療学部鍼灸学科講師
- 2010年 関西医療大学保健医療学部鍼灸学科准教授
- 2018年 関西医療大学保健医療学部・関西医療大学大学院保健医療学研究科教授

ジストニアの診断と治療、病態

徳島大学病院 脳神経内科・特任講師 宮本亮介

ジストニアとは運動障害のひとつで、骨格筋の持続のやや長い収縮、もしくは間欠的な筋収縮に特徴づけられる症候で、ジストニア運動（しばしば反復性の要素を伴う）とジストニア姿位、あるいは両者からなる。ねじれる動きとして観察されることが多いが、顔面筋においてはねじれはみられず、例えば瞬目の増加や口のもぐもぐした動きとして観察される。ジストニアは発症年齢、罹患部位（局所性、分節性、全身性、多巣性、片側性）、経過、随伴症状などにより分類される。ジストニアの原因は多岐にわたるが、大きく、遺伝性、後天性、特発性に分類される。Japan Dystonia Consortiumのデータでは、遺伝性ジストニアの割合は約10%であった。現時点では特発性に分類されるものがなお多くを占めるが、それらについても浸透率の低い遺伝性疾患と考える向きがあり、新たな原因遺伝子の同定とその機能解明が待たれる状況である。ジストニアの病態は不明な点が多いが、DYT-TAF1 (DYT3) やDYT-TH (DYT-5b) の機能解剖学的解析により、線条体のストリオソームの機能不全が発症のキーとなる可能性が示唆されている。ジストニアに対する新たな治療法開発のためには、まず特異的な治療ターゲットを同定する必要があり、私達は線条体ストリオソーム、特にストリオソーマルD1R陽性細胞に注目して研究を行っている。本講演では、ジストニアの診断、現行のジストニアの治療、さらにジストニアの病態について紹介する。

略歴

- 2005年 医療法人鉄蕉会亀田総合病院 初期研修医
- 2007年 医療法人鉄蕉会亀田総合病院 神経内科医員
- 2009年 徳島大学病院 医員
- 2011年 広島大学原爆放射線医科学研究所 分子疫学 特別研究員
- 2013年 徳島大学病院 医員
- 2014年 徳島大学大学院 医歯薬学研究部臨床神経科学分野 助教
- 2021年 徳島大学病院 脳神経内科 特任講師